

李庭植 著

『朝鮮民族主義の政治学』

Chong-sik Lee, *The Politics of Korean Nationalism*, U. C. Press, University of California, Berkeley, 1963, 342 p.

I

朝鮮のように長く植民地状態にあった国の歴史を考えるには、その国の民族運動がどのように生じ展開したかを検討することが重要と思われる。

本書は1876～1945年に至る70年間の朝鮮の政治史を扱ったものである。この間の朝鮮の政治は、朝鮮人の側からみれば、民族としての意識の確立と独立のための闘いであった。朝鮮が遅れた社会構造のうちに低迷していたときに武力をもって急激に世界政治の只中に投げ込まれ近代化させられたということと、また朝鮮を支配したのが唯一の非西欧列強たる日本であったことが、その民族運動に他の植民地民族主義と区別する性格を与えた。

ペンシルバニア大学政治学科の助教授である著者は、そのような外枠をもった朝鮮の民族運動がどのように展開していったかを、民族運動の中で指導者層が果たした役割、かれらの政治行動のパターンなどの分析を通して接近しようとしている。それが本書の特徴の一つとなっているといえよう。

著者李助教授は朝鮮語はもちろん、中国語、日本語にも堪能で、書中に豊富な文献——特に日本の特高関係や総督府の記録——が引用され、政治学的考察に重点をおいているが、きわめて実証的な歴史論文になっている。

本書のもう一つの特徴は1919年以後の海外における朝鮮民族主義者の活動にきわめて大きなスペースがさかれていることである。

3・1 運動に対する徹底的な弾圧は、朝鮮国内の運動をほぼ根こそぎにしまった。その後、民族主義者は海外で抵抗するほかなかったのであるが、その海外活動は結果として、また、客観的には本国の地位をなんら改善するものでなかったし、民族運動が直接の目的とする独立は、かれら民族主義者自身によってはかちえられなかった。そのためか一般の朝鮮史家は海外の民族主義者の動向にあまり大きな注意を払っていない。しかし、中国はなんらかの形で本国と関係をもちつつ行動しうる

唯一の場所であったから、この地で多くの民族主義者が独立運動に情熱と生命を注いだのである。

著者はこの地の朝鮮民族主義者の離合集散のうちに、朝鮮の民族運動が内包していた種々の問題を解明する絶好の資料を見いだしているように思われる。

ⅡとⅢで本書の大筋を紹介し、Ⅳで若干の感想を付記する。

II

「日本が朝鮮を征服し支配したことにより、朝鮮民族主義は覚醒し確立した。日本は朝鮮民族主義にとって否定的な、だが最も力強い象徴——民族の敵であった」。

そもそも民族主義とは何だろうか。著者によれば、「一民族の構成員であるという意識——（民族的一体感）」、あるいは「民族の力、自由、繁栄を増進させようとする欲求」である。そしてさらに、民族主義は歴史的展開として二つの段階に区別される。すなわち伝統的民族主義と近代的（あるいは積極的）民族主義である。

伝統的民族主義は「最初の（外国勢力あるいは文化の）浸透および占領に対する抵抗、外国の政治的あるいは経済的強制的衝撃ないし行動によって引き起こされる初期の暴動、急速な文化的変化によって作りだされた緊張および欲求不満の心理的または感情的なけ口となる土着的、救世主的運動」によって性格づけられる。その主張は現状維持である。1876年開国して以来1910年に至る朝鮮民族主義は、おおむねこの伝統的民族主義の性格をもっていたといってよい。その最初の爆発は1894年の東学党の乱である。東学党は宗教的な結社であったが、1894年の暴動には“外国人恐怖的”な性格が濃厚で、暴動の後期には反日スローガンが扇動に使われた。1894～96年日本は初めて朝鮮を支配し、武力によって近代化しようとしたが、かえって朝鮮民族の反感を強めた。この感情のうちから民族意識が芽ばえてきた。このときの民族主義の特徴はきわめて保守的な性格のものだった。すなわち、このとき日本に対する敵対的感情を醸成し、民族意識の形成に力あったのは、閔妃の暗殺と弁髪禁止だった。「王妃は……ほとんど20年間朝鮮政治の渦の中心にあり、義父たる大院君と熾烈に闘った。かの女の暗殺者が日本人でなかったら、多分この殺人事件は一般感情をたかぶらせたりしなかったろう。かの女は専制独裁的な機構の一部分であり、内紛と失政に巻き込まれていた。かの女の関心はほとんどの場合朝鮮人民の幸福ではなくかの女とその一族の力を高めることだった。」また、弁髪

は「それに劣らず保守の象徴であった。たとえ急進的な政府とそれよりもっと急進的な日本人助言者がその切断を命じなかったとしても、西欧的な思想や習慣が朝鮮に持ち込まれるようになれば漸次消滅すべきものだった」のである。

このような民族主義における保守的性格の優越は、朝鮮の近代化に決定的に重要だった1876～1905年の30年間を浪費させてしまった。1896～98年の改革論者の失敗の原因も、かれらのきわめて穩健な政策が兩班階級(注1)の握る政府のよく受け入れるものでなかったということのほか、上のような一般の国民感情にあったのである。

朝鮮の民族主義がいわゆる近代的民族主義に移行したのは、併合以後のことである。1910年朝鮮を併合した日本は、武力をもって朝鮮の近代化を急いだ。その近代化は朝鮮人の利益をまったく無視して行なわれたが、国内になんら民族主義的組織をもたなかった朝鮮人は、その抵抗精神を内向させながら第1次大戦の終末を迎えた。

アメリカ大統領ウィルソンの民族主義を呼び水に勃発したのが、1919年の3・1運動である。朝鮮の歴史のうちで、この運動こそ本来の意味で民族運動と呼ばれる最初のものであった。この運動で「朝鮮の民族主義はその着実な進歩の道に踏み込んだ」。これ以後朝鮮の民族主義は近代的民族主義の段階にはいった。近代的民族主義はつぎのような特徴をもつ。「(1)自治を明確な目標とする。(2)一体感の認識。(3)民族主義者の目的を追求する上での永続的な政治連帯の発展。(4)指導層における西欧化された分子の支配。(5)近代的政治価値理念の支配」である。このような近代的民族主義の成立が可能であったのは、つぎの三つの要因によると考えられる。すなわち、日本および西欧との増大する結びつき、新しいエリートの出現、朝鮮における日本人の絶えざる存在、である。

前2者は緊密に結びついている。日本で学んだ学生たちは日本における経済的、技術的、知的進歩をみると同時に朝鮮の後進性を認識した。かれらは本国に帰ると、古いエリートに代わって民族の指導者になった。また、指導者の転換に力あったのはキリスト教会である。布教師たちはキリスト思想のみでなく西欧の自由思想を伝えたので、古い世代のかんりの指導者は布教師たちとの接触を通じて、その思想行動様式を変えた。

世界中の植民地民族主義者が西欧列強あるいは白人種を全体として疑いの目で見ていたとき、朝鮮の民族主義者は西欧を自由主義と新しい文明の開拓者とみなしていた。西欧列強と日本との衝突を不可避とみてそれが朝鮮

の独立をもたらすと考えた民族主義者は、すべての国際会議に注目した。しかし西欧は朝鮮に無関心だった。失望した民族主義者をとらえたのは、マルクス主義であった。かれらは国をまず考え、それから個人を考えるようになった。朝鮮の民族主義者はその行動では強い自己中心主義を示したが、観念的には個人の立場を認めなかった。これら民族運動の自由主義、急進主義には欠けたものがあつた。これらはすべて輸入品であった。朝鮮のように保守主義の深く根ざした国で、そのような思想は習慣や行動まで容易に変えるものでなかった。

3番目の要素——朝鮮における日本人の絶えざる存在——は朝鮮の民族主義に積極的、否定的両面の影響を与えた。一方に、日本人の態度は朝鮮人の誇りを傷つけ、経済面での日本人との競争は、それが朝鮮人の貧しさの原因であることを思わせた。他方、日本の進んだ企業、生活様式は、朝鮮人に模範を示し、同じ利益を得るために独立の獲得を欲せしめた。

このようにして朝鮮における近代的民族主義は成立するのであるが、すでに述べたように3・1運動に対する徹底的な弾圧は本国における民族主義的活動をきわめて困難にした。1919年以後、朝鮮における政治的制限は若干緩和されるが、独立を追求する運動は巧みに弾圧された。1次大戦後の日本帝国の力のよりいっそうの増大は、民族主義者の活動を不毛にした。1931年満州事変の勃発は日本の軍国主義化を促進し、それが朝鮮に及ぶに至り、国内での民族主義者の活動はまったく不可能になった。民族主義者の活動は、中国を中心として続行されることになる。

(注1) 朝鮮の貴族階級。

III

中国を中心とする朝鮮の民族運動は1919年より1945年まで25年間続いた。が、臨時政府を中心とする民族主義者の活動はその最後に至るまで派閥争いから抜け出すことができなかった。

3・1運動当時、満州に60万、シベリアに40万、アメリカに6000、上海に400の朝鮮人がおり、それぞれ独自の行動をとっていたが、主たる流れは、

(1) 武装派 1919～31年までの武装派は、主として満州、シベリアにいた義兵(注2)の流れをくむもので、古い体制に対する忠誠を維持し、保守的な民族主義者だった。この地域には共産主義の浸透が激しかったが、シベリアの民族主義はその中であつてソ連派と伝統派が衝突

し消滅してしまった。残ったものも1931年までに日本軍に掃蕩された。

(2) 宣伝主義者 かれらはアメリカにいた李承晩らを中心とするもので、朝鮮独力による解放を不可能とみ、西欧列強特にアメリカに訴えることにより、独立をかち得ようとした。かれらは1945年に至るまで、かれら自身の派閥争いを繰り返しながら、宣伝活動に従事し、武力による解放の意義を認めようとしなかった。

(3) 漸進主義者 1919～21年の間、臨時政府の実質上の代表者であったアン・チャンホらの考えで、世界3大強国たる日本に抗するには、朝鮮自体を経済的に強化し、組織的な力の培養を計らねばならないと考えていた。

以上の3派によって1919年上海に臨時政府が結成されたが、各派はまったく別々に行動をとっていたので統一は長続きせず、1921年には早くも名目上だけのものとなった。1921～31年の間、各派の活動はどれも実効をみなかった。運動を統一しようとする試みが幾度となくなされ、韓国労兵会、国民代表会などの組織が作られたが、たちまち瓦解してしまった。この間、朝鮮民族運動には新しい要素が加わった。ソヴェトの成立に伴う共産主義の影響である。上海にも共産化する民族主義者が多くなり、左右の対立も派閥争いに色をそえた。この対立は1931年満州事変が起り、民族運動がその勢いを盛り返すと顕著になった。

統一戦線の結成が急がれたが、右派は大きく分裂し、この時期には左派が多数を占るようになった。左派は朝鮮革命党を設立し統一した。右派はそれに対抗して韓国国民党をつくって統一した。しかし、統一といっても実は「指導者—とりまきグループの個人的結合は姿を消していなかった」。戦争だけがそれぞれのグループを結合する力をもつと思われたが、1937年日中戦争が始まると中国における国共の分裂に対応して、朝鮮の民族主義者もはつきり別れて戦争に参加した。そして、この際も臨時政府によった人々は、実質上なんらの力も持ちえず、離合集散を繰り返すにとどまった。

朝鮮の民族運動はなぜこのように派閥争いのうちに低迷していたのだろうか。

まず「海外の政治家の間の派閥争いはリーダーシップの問題と密接に結びついている。支配的な指導者の欠乏が派閥争いを絶えまなくした」。しかし、どうして海外の民族主義者の中に強い指導者が現われえなかったのだろうか。「中国のようなどころでの強い指導者は二つの条件が必要である。つまり、多くの外国援助を得られるこ

と、つぎに支持者を沢山引きつける個性の持ち主であること」。しかし援助を得るには力を示す必要がある。かくてかれは派閥争いをせねばならないわけである。しかし、もっと本質的な原因がある。植民地における民族運動は、外国勢力と結びつく旧体制に対する徹底的な闘いを通してのみ、つまり近代化という役割を果たすことにより、その力を十分に発揮することができるのであるが、朝鮮の場合、対決すべき外圧が武力的な近代化を行なおうとしたので、それに対抗した民族運動は内部に保守主義の性格を保持した。すなわち、対決すべき旧体制がむしる民族運動の中に持ち込まれた。派閥争いは旧社会の生存様式であった。

第2にイデオロギーの問題である。1927年上海の容共勢力が統一戦線を組んだとき、参加を拒否したアン・チャンホは「共産主義者は行動の背後にかなりの理論をもって運動を行なっている。われわれ民族主義者もかれらに対抗するために政治原則をうちたてねばならない」と述べたが、これは当時の伝統的民族主義者一般にいえることであった。民族主義が外国支配への抵抗ということからのみ発生していたため、その思想的基盤は脆弱だった。それゆえ、進んだ文明を見せつけられ、朝鮮の実情に、失望して進んで日本に協力し、日本帝国の一員として国力増進につとめようとする動きもあったし、他方では1931年以後、多くの民族主義者が共産主義に投じていくことになった。「朝鮮政治に対する共産主義の進出は遠心的な力を増大させた」。

第3に本国の基盤から離れていた民族主義者は、容易に外国列強の力により独立をかちとるという思想に落ち込んだ。かれらの力の弱さと帝国日本の強大さがそれを不可避にした。アメリカおよびハワイにいる朝鮮民族主義者は、アメリカの同情を得ることを第1義に考えていたし、日中戦争勃発後の左右の完全な分裂は、抗日中の2大勢力、国民党軍と八路軍の対立にそのまま巻き込まれたものであった。(戦後の南北朝鮮の対立は米ソの対立を反映したものだったが、朝鮮の民族主義運動の中にもこんな形で芽ばえていたのである。)

(注2) 1907年、日本によって武装解除された韓国軍のうち、それに反抗してバルチザン活動にたずさわったもの。

IV

以上みたように本書は民族主義者の政治行動に焦点をおいて叙述している。著者の興味もまたそこにあったわ

けであるが、残念なことは民族運動の思想上の発展の系譜にふれられていないことである。民族主義者らは朝鮮の実情をどうとらえ、どのような未来像をもっていたのか。今日、朝鮮はまったく相異なる二つの政治体制のもとにあって、まったく相異なる未来像を描いているように思われる。それと民族運動における思想上の発展がどう結びついているのか。また、日本の植民地支配をどう考え、どういう意味をみていたのか。民族の敵といわれた日本とふたたび接触を回復しようとしている今日、朝鮮人の日本観はどんなものであるのか。それを形成するのに民族運動はどんな役割を果たしたのか。

つぎに経済構造との結びつきである。遅れた経済状態

にあった朝鮮の民族運動は、3・1運動の際も天道教、キリスト教などの組織に多く依存していた。その後、労働組合などの組織が国内で闘いを展開したが、海外の民族主義者はほとんどそれらと結びつきを持っていなかったように思われる。海外の民族運動が本国の経済社会と結びつきを持たなかったことが、その弱さの一因であったと思われるが、そのような分析はなされていない。

そのような点で残された問題はあるにしても、中国、日本の文献を駆使しながらの実証的な分析は、朝鮮近代の政治的発展を考える上で、大きな助けになるものと思われる。

(調査研究部東アジア調査室 谷浦孝雄)

THE DEVELOPING ECONOMIES

Quarterly Journal

of

The Institute of Asian Economic Affairs

Volume II, Number 2

March 1964

- Land Reform and New Marriage Law in China..... Noboru Niida
 Possibility of Regional Economic Integration in
 Southeast Asia..... Noboru Yamamoto
 Problems of the Rice Trade between Burma and Japan..... Katsu Yanaihara
 Landownership and Land Reform Problems in
 the Philippines..... Tsutomu Takigawa
 On Arab Socialism..... Takeshi Hayashi
 Ecology, Economy, and Social System in
 the Nepal Himalayas..... Shigeru Iijima

BOOK REVIEWS

sole agent MARUZEN COMPANY, LTD.,
 P.O. Box 605, Tokyo Central, Tokyo, Japan